

Special 特集：若手医師フォーラム

英語力・プレゼン力を磨く絶好の機会。 国際的な舞台を見据えたステップにも。

口演発表最優秀賞

Prevalence of serious bacterial infections among febrile infants younger than 3 months and validation of four criteria

埼玉病院 初期研修医 大川 愛美

英語でセッションできる貴重なチャンス。 同世代の発表にも感銘を受けました。

——応募のきっかけとテーマは？

今回のテーマは、生後3ヶ月未満の発熱児を対象とした臨床研究です。重症細菌感染症の疫学調査および欧米で提唱されている発熱児評価のためのcriteriaの検討を行いました。「尿路感染症の有病率が欧米よりも高い」「欧米のcriteriaは日本でも有用である」という2点が主な結論です。もともと小児科コースの初期研修医4名で臨床研究を実施するお話をいただいていたのですが、小児科診療に携わるようになり、生後3ヶ月未満の発熱児に対する評価の難しさを実感したため、このテーマを選びました。

——どんな点に苦労しましたか？

質疑応答の準備がなにより大変でした。英語は大学受験以来、ほとんど使う機会がなかったため、院内で行った予演会では質問にまったく答えられ

ず、くやしい思いをしました。指導医の先生と質疑応答の練習を繰り返し、少しずつ答えられる質問を増やしていきました。

プレゼンテーションの内容はすべて暗記して、どこからでもスムーズに話し出せるように練習しました。また、内容自体も医療統計学的にはそれほど難しいものではないのですが、分かりやすく伝えること、多少文法が間違っても自信を持って話すことを意識しました。

話し始めは少し緊張しましたが、前を向いて進められたのは良かったです。質疑応答は簡潔に答えすぎたかなとも感じますが、概ね練習通りに発表を終えることができました。キーポイントを強調するように気をつけたものの、ポインターを使うなどの発表の仕方はもう少し工夫ができたかもしれません。

他の発表者もほとんどの方が初期研修医で、か



つ、難しい内容の発表でしたので、とても刺激になりました。スライドの分かりやすさなど、参考になる点も多くありました。

——今後参加する方へのアドバイス

海外で英語の発表をするのはかなり勇気が必要ですが、初期研修医のうちから応募できる英語セッションの機会があるのはありがたいです。日本語より大変ですが、頑張れば、皆さんに応援してもらえますし、得られるものが多いことも確かです。初期研修医が1人で全部を担うのは厳しいと思いますので、指導医の先生や仲間たちと取り組んでください。

口演発表最優秀賞

A birth cohort study to identify biomarkers for tolerance or allergy to food in infancy

三重病院 アレルギー科、小児科 小堀 大河

長年、取り組んで来た研究の成果を発表。 アレルギーに苦しむ子どもたちを救いたい。

——応募のきっかけとテーマは？

今回のテーマは、食物アレルギーがなぜ発症するのかというブラックボックスに焦点をあて、「食物アレルギーの発症と免疫寛容（通常通り食べられるという状態）の違いについて、免疫グロブリンの親和性がどのように関わるかを研究する」というものです。

先行研究において、徳島大学生体防衛病態代謝研究分野の木戸博教授が開発されたDLC (diamond-like carbon) チップという高感度マルチ抗原アレルギー診断チップを用い、今までIMMUNOCAP測定では検出できなかったIgEが臍帯血や母体血の中で発見され、それが低親和性のIgEであることが分かりました。さらに、OVM (オボムコイド) 特異的IgEについて親和性を調べると、低親和性のIgEではなく、高親和性のIgEの優位な群が持続性の湿疹に強く関与することが分かっ

ています。食物アレルギーについても、おそらく低親和性のIgEの優位な群が免疫寛容に、高親和性のIgEの優位な群が食物アレルギー発症に関わると思われませんが、実際に食物負荷試験で確認したわけではないため、1歳時点で確かめることがポイントでした。

食物アレルギーは増加傾向で、アナフィラキシーのリスクも考えると、社会的にも重要な疾患の1つです。特に乳幼児期に発症することが多く、小児科医だけでなく幼子を育てる保護者からも、疾患の理解と治療の進展に期待が持たれている分野でしょう。

今回の研究を通して食物アレルギーの診断について、さらに有用なバイオマーカーが発見されれば、機序の理解や誤解の軽減、今後の治療に結びつくと考えています。そのような点からやりがいを感じ、テーマに選びました。



——どんな点に苦労しましたか？

アレルギー分野について普段聞き慣れていない方でも理解しやすいように、できる限り分かりやすくスライドを準備しようと考えました。発表時間が6分とやや短めだったこともあり、言いたいことをまとめるのに苦心しました。

——今後参加する方へのアドバイス

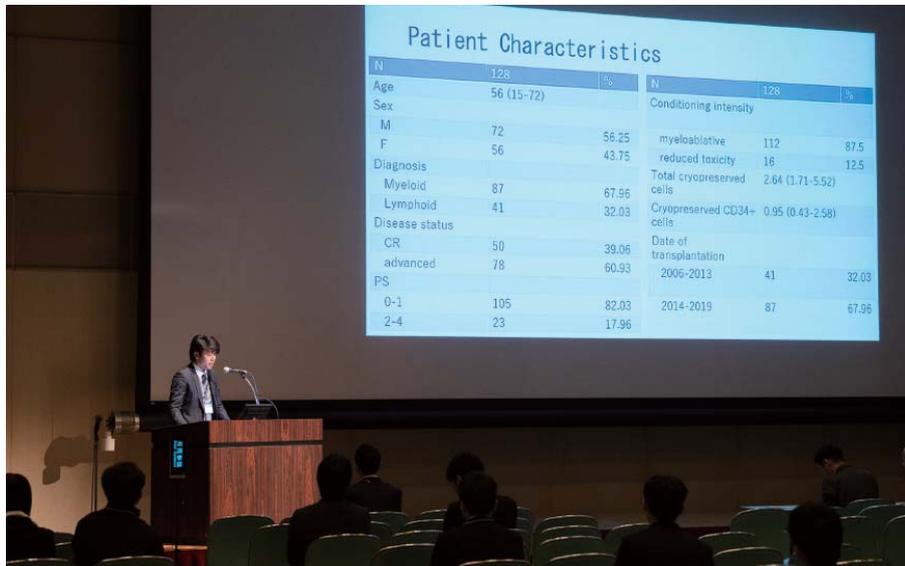
日常の臨床的な疑問をそのままにせず、研究として調べて発表する姿勢は分野を超えて刺激を受けます。若手の先生方の熱意に触れる機会に参加でき、今後の活力になりました。将来、世界に羽ばたいていく若手、特に研修医の先生方に積極的に参加していただきたいです。



ポスターセッション



ディスカサントの先生方



口演発表



ベストポスター賞

A dequate Chronic Kidney Disease (CKD) Managements May Increase the Number of Hemodialysis (HD) Patients

熊本医療センター 初期研修医 生田 源起

市の対策事業の成果と来院患者の差異に着目。参加者の意識の高さに刺激を受けました。

今回のテーマは、積極的なCKDへの介入は透析導入数を増やす可能性があるということです。熊本市では2009年より透析導入数を減らそうと市をあげてCKD対策事業に取り組み、実際、透析導入数は減少しています。しかし、当院ではむしろ透析の導入数が増加しているのを不思議に思い、市の対策事業が始まってから、当院の年間透析導入数などの推移を調べました。本来なら早期介入により、透析導入数は減り、医療費の削減が見込まれるはずですが、必ずしもうまくいかない点に着目しました。

大変だったのは、通常の病棟業務の合間で

行った統計などのデータの翻訳です。自分は帰国子女ではないため、お世話いただいた臨床研修部長の富田先生のお力添えで、なんとか期限内に終わらせることができました。また、質問を想定した準備にも苦労しました。

練習では発表時間を超えることも多かったのですが、本番ではなんとか時間内に終わらせることができました。ただ、文章にメリハリをつけて読んだり、観客を見ながら話したりすることがあまりできなかったのは残念でした。

他の発表を聞きましたが、どの参加者も細部まで詰めていて、意識の高さに刺激を受けました。



また、今回のように英語に翻訳して英語で話すという過程はなかなか経験できないこともあり、非常に勉強になりました。

熊本医療センターでは、外国人の先生を招聘して研修医全員がプレゼンテーションするというイベントが毎年あり、その経験がとても役に立ったと思います。



ベストポスター賞

A rare case of human hepatic dirofilariasis

仙台医療センター 消化器内科 関野 晃子

苦手意識のある英語に少し自信が持てました。今後は世界レベルの医療にも目を向けたい。

今回のテーマは、犬糸状虫の内臓幼虫移行症による肝好酸性肉腫の1例です。犬糸状虫はイヌを終宿主とする寄生虫で、ヒトへ侵入しても死滅することがほとんどですが、ヒトの肺へ寄生する肺犬糸状虫症の報告はいくつかあります。肝臓へ寄生した報告は世界的にもまれであり、今回報告させていただくこととしました。

準備では英語の文章作成がとにかく大変でした。医学英語特有の言い回しもあり、似たような論文を探して真似るところから始めましたが、結局、指導医の先生にほとんど修正していただくことになってしまいました。ただ、非常に勉強になりました。

当日は緊張もあり、暗記した原稿をうまく話すことができませんでした。質疑応答に関しては、予想していた質問には英語で答えられましたが、想定外の質問には日本語も交えて説明してしまいました。発表者の自分では思いつかない質問もあったため、どんなことを疑問に思うのかを他の先生方に聞いておけば良かったのかもかもしれません。

皆さん珍しい症例を報告していて、とても興味深いものでした。英語での発表ということもあり、すべてを理解したわけではありませんが、自分で苦労して発表した上で、他の人の発表を聞く自分にはないものに気づかされました。



英語で発表するにあたり、関連した英語の論文を読み、また、自分で文章を作成する過程を経て、少しですが、英語に自信を持てるようになりました。今回の経験を活かして、世界レベルの医療にもっと関心を持っていければと思います。